

18世紀在華イエズス会士を媒介とした 中国思想の伝播とその影響

新居 洋子

武蔵大学人文学部日本東アジア文化学科 非常勤講師
(現 東京大学人文社会系研究科 研究員)

緒 言

近代に入る前、ヨーロッパへの中国情報の伝播において最も重要な役割を担ったのが、中国で活動したイエズス会宣教師、いわゆる在華イエズス会士である。16世紀末に最初のイエズス会士が中国内地に足を踏み入れてから、18世紀末に教皇がイエズス会解散命令を発し、在華イエズス会士最後の世代が死去する19世紀初めにいたるまで、彼らは中国の文化や思想、政治や歴史といった多方面にわたる著述をヨーロッパへ送り続けた。

筆者はこれまで、最後の世代すなわち18世紀後半を代表する在華イエズス会士、アミオ (Jean Joseph Marie Amiot) の著述を中心に検討を進めてきた。アミオは主にフランス国務卿やアカデミー人士と盛んに文通を行い、膨大な量にのぼる報告をヨーロッパへ送った。筆者のこれまでの研究では、これらのアミオの著述が、同時代ヨーロッパおよび中国の思潮との密接な連関のなかで練り上げられたことが明らかとなった。

ただしアミオの清代中国における具体的な活動実態については、いまだ明らかでない点が多い。在華イエズス会士は清の入関以降、歴代皇帝の命をうけ、欽天監(天文観測、暦の作成などを掌る機関)をはじめ宮廷各所に登用されている。アミオも「内閣蒙古堂繙譯」、すなわちラテン語・ロシア語-満洲語間の翻訳官として清朝に仕えたことが檔案史料¹⁾に記されている(ただしロシア語を実際に使用したかどうかは疑わしい)。

しかしその他数点を除いて、アミオを含む18世紀後半の在華イエズス会士の、中国における具体的な活動を直接証明する史料はほとんど見当たらない。これは中国士大夫と盛んに交流し、多くの中国文献にその名を残した明末のイエズス会士らと大きく異なる点である。その主な原因として二点考えられる。一つ目は、雍正元年に正式に禁教令が施行され、続く乾隆帝、嘉慶帝もこの政策を踏襲したことである。二つ目は、上記の政策にとも

ない、在華イエズス会士に対しいわゆる北京四堂に居住することが義務づけられたことである。北京四堂とは、もともと明代および清代において、皇帝から土地を下賜されるなどして在華イエズス会士が建てた教会であり、南堂が宣武門内、東堂が東安門外、北堂が西安門内、西堂が西直門内に位置する。つまり全て内城(八旗の居住区域で、八旗に属する以外の漢人の居住区域=外城と厳密に区別された)に位置したのである。在華イエズス会士も内城から出ることを禁止、もしくは制限されたと推測される。すなわちこの時代、在華イエズス会士の中国士大夫などとの交友範囲自体がかなり限られたものであった可能性が高い。

とすれば、いかなる史料から在華イエズス会士の中国における痕跡をたどり得るのか。本研究はこの点について模索するところから出発した。

研究の方法

アミオの中国における活動実態について、残されたほぼ唯一の手がかりは、彼が清朝の翻訳官だった点である。この点についてはすでに触れた檔案史料のみならず、ヨーロッパ側史料にも少なくとも一点、比較的詳細な言及がある。アミオと同じ職責を担ったと考えられる在華イエズス会士、ドリエル (Jean-François d' Ollières) が1780年にヨーロッパへ送った手紙である²⁾。そのなかではモスコヴィト(ロシア)-清朝間の交渉において、互いの文書がラテン語と満洲語の翻訳を介してどのように取り交わされるのか、具体的な記述がみられる。これらの史料から、アミオの職掌は文章の翻訳、すなわち書くことを主としており、また清朝の外交政策という比較的重要な方面に関するものだったと推測されるため、こうした翻訳に関する史料の残っている可能性があるのではないかと考えた。

そこで筆者は、2014年8月~2015年6月にかけて、北

京市、台北市、パリ市の各機関で史料調査を行った。北京市では北京大学図書館古籍閲覧室、中国国家図書館古籍館、台北市では故宫博物院図書館、パリ市ではフランス国立図書館写本室を調査地とした。前者三つの機関は、いずれも清朝関係の檔案や古籍に関して特に豊富な所蔵を有する。またフランス国立図書館写本室は、在華イエズス会士の報告手稿を多く蔵する。

結果と考察

調査の結果、各機関で興味深い史料がいくつか発掘されたが、ここでは紙幅が限られているため、本研究にとって最も重要な史料に絞って分析の結果と考察を述べたい。

その史料は北京大学蔵『四夷館譯語』二種（資料ID=212654-61、請求番号=X/419.9/6580）である。北京大学図書館古籍閲覧室にて閲覧した。漢文、晒印本で一函八冊、前六冊が「西洋館」、後二冊が「緬甸番書」の全二種からなる。成書年代、作者ともに不明である。いわゆる『華夷譯語』、すなわち明朝および清朝において作成され、朝貢各国（を中心とする諸外国）との通交の際用いられた対訳辞書的一种と思われる。本研究にとって特に重要なのは、二種のうち「西洋館」編である。当該史料の作成、利用には在華イエズス会士が深く関わったものと推測されるからである。以下、北京大学蔵『西洋館譯語』と称して論じる。

北京大学蔵『西洋館譯語』については、管見の限り先行研究にほとんど言及がみられない。その内容は「拉氏諾語」＝ラテン語と漢語との対訳語彙集である。香薬門をはじめ、花木門、人事門と続き、珍宝門までの全20門からなる。香薬門の冒頭を例として示す。

Sandalum 檀 香 三達魯穆〔※「穆」は小字〕

ここに明らかなように、(1) 語彙のラテン文表記、(2) 漢文表記、(3) ラテン語の発音の漢文による音写からなる。

この史料の来歴には謎が多い。そもそも四夷館とは、明の永楽帝のとき、言語文字を異にする朝貢各国との通訳のため設けられた役所で、当初韃靼（モンゴル語）、女直（女真語）をはじめとする八館が置かれ、緬甸（ビルマ語）もそのなかに含まれた。その後明末までにさらに二館を加えた。清朝は明朝の制度を引き継ぎつつ、名称を四訳館に改めた。乾隆13年（1748）、朝貢使節を接

待する会同館と合併し会同四訳館となった。

これら四夷館あるいは四訳館によって編纂されたのが『華夷譯語』である。『華夷譯語』には成書年代と内容の異なるいくつかの版がある。石田幹之助以来、甲乙丙の三種本に分けられ、さらに乾隆13年に設置された会同四訳館が作成したと考えられる丁種本も発見されている³⁾。北京大学蔵『西洋館譯語』は題目に「四夷館」の文字を含むため、明代に編纂された乙、丙種本に連なる可能性がまず考えられるが（甲種本は漢語とモンゴル語のみの対訳）、構成において一致しない点が多い。そもそも甲乙丙種本にヨーロッパ語が含まれるという記述は、管見の限り明清時代中国の史料にも先行研究にも見当たらない。

その点、北京の故宫博物院にて発見された丁種本⁴⁾は、「四夷館」と「四訳館」の齟齬があるとはいえ、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ポルトガル語そしてラテン語という六つのヨーロッパ語との各対訳語彙集を含むことが先行研究によって判明しており、英語を除く五つの言語を扱った各編の冒頭には「西洋館」の表記が見られるようである。かつラテン語編には「拉氏諾語」という表題が付けられた点でも『西洋館譯語』と一致する（清代における「ラテン」の漢文表記は「臘定諾」や「拉體諾」などかなり揺れており、「拉氏諾」の表記は非常に珍しい）。また、丁種本は清朝に仕官した宣教師（すなわちほぼイエズス会士）によって編纂された可能性が高いという。

私の知る限り、北京の故宫博物院所蔵文献は原則開放されていないため、丁種本との確実な対照を行うにはさらに機会を待たねばならない。しかし北京大学蔵『西洋館譯語』が丁種本と一致、すなわち清代の版本だとすればアミオがその作成および利用に関わった可能性は高い。なぜなら上述のごとく、アミオは「蒙古堂繙譯」の職掌を担ったが、『大清會典事例』卷十五・内閣五・職掌三・外藩各部落文字には、諸外藩（および外国）の文字はほとんど内閣蒙古房（堂）で行わせるが、ラテン語のみ「西洋堂の者に伝え翻譯させる」と記されているからである。つまりアミオも名目上は蒙古堂に属したが、実態としては「西洋堂」で翻訳活動を行ったと思われる。この「西洋堂」を「西洋館」と読み換えることが可能だとすれば、『西洋館譯語』がアミオの清朝翻訳官としての具体的活動に直接関わる史料である可能性もかなり高まる。こうした可能性がある以上、上述のごとく故宫博物院所蔵の丁種本が閲覧の難しい史料であることから

いっても、北京大学蔵『西洋館譯語』を研究する価値は非常に高い。今後、対訳の内容を中心に、研究を深めていくつもりである。

要 約

本研究では清代中国における在華イエズス会士の活動実態にせまるべく、手がかりとなる史料を調査した。そのなかで発掘された北京大学蔵『西洋館譯語』は、漢語とラテン語の対訳語彙集である。分析の結果、『華夷譯語』丁種本と類似しており、翻訳官として清朝に仕える在華イエズス会士によって作成、利用された可能性が高いことが明らかとなった。

謝 辞

私事ですが2014年5月に博士論文を提出し、秋に博士号を取得しました。こうしていったん博論から解放された後、各地で自由に史料調査をしながら今後の課題を模索する時間を与えられたことで、すみやかに気力を回復することができました。調査で発掘されたいくつかの史料は、私の研究の新たな突破口になり得るものです。このような機会を与えていただいた公益財団法人三島海雲記念財団の関係各位に心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 中国第一歴史檔案館編：清中前期西洋天主教在華活動檔案 (4), p. 479, 中華書局, 2003.
- 2) J.-F. d' Ollières: *Lettres Édifiantes et Curieuses* (du Querbœuf éd.), 26, p. 484, Merigot, 1783.
- 3) 栗林 均：『華夷訳語』（甲種本）モンゴル語全単語・語尾索引, p. i, 東北アジア研究センター, 2003.
- 4) 黄興涛：江海学刊（2010年第1期）, pp. 150-159, 2010.